

和の風 町長随想

増澤 善和

天皇家と南越前町(四)

③ 糞置荘の鉄

糞置荘とは、現在の文殊山北麓の福井市半田町・二上町・帆谷町にかけての微高地に、奈良期～平安期に拠点集落を形成した東大寺の荘園名である。昭和四十八年頃、北陸自動車道建設に先立ち、調査発掘された遺跡であり、現在も周辺部の調査が続いている。この遺跡の特徴は、弥生・古墳(継体)・奈良・平安の各時代の複合集落跡であり、各時代の貴重な生活遺物が大量に発見された。中でも継体天皇と同時代の住居跡が五十五戸も発見されたことに注目したい。

さて、糞置という名前についての定説はないが、現地の人達は人糞説をとる。発掘し終わった跡には「ソブ」と呼ばれる鉄を含んだ湧水で黄金の池となるからである。このソブは、遺跡背後にある多くの古墳群から流出している。現地の人達は、人糞に似たソブの沈殿物を焼いて鉄ができることを実証している。多分継体時代に、この地が金津・日野山周辺と並んだ製鉄地だったと思われる。その理由は、先述の古

墳が散在でなく線上に並ぶ―即ち同一墓坑内に多数の土器棺が置かれており、これは鉾石を掘り出す間府(鉾道・方言ではマンプ)を利用したのではないか。さらに、半田町には愛宕神社(火之加具土神という火の神)・白山神社(鉄の神)・水理神社(水の神)と製鉄と関係深い神社が揃っている。また、クソは人糞ではなく、鉄鉾石のクズを金カスとか金クソと呼び、これの捨て場所から村名となったとしたい。またソブは間府から出る素府(鉄気の素)であり、牧谷鉾山廢坑跡からも同じようなものが大量に流出している。

この糞置荘の榎坂を通る継体古道は、この時代の越前三大製鉄地を結ぶ重要幹線道路であったと推理したい。(戸ノ口坂は、朝倉時代に開発されたのではないだろうか)

養蚕 継体天皇が即位の施政方針として、「国に耕さざる男子あれば世に飢うる人あり。郷に織らざる女子あれば縣(地方行政区)に寒ゆる者あり。故に歴代の天子は皆みづから田作りて農事を励まし、后妃は手づから桑を採りて蚕業をすすめよ。されば百僚(役人)

より庶民に至るまで、如何ぞ耕さず織らずして止むべけんや」と、近親者(皇族)や政治に携わる者達に申されたこと伝えられている。では、この時代の蚕(飼い蚕が語源)と南越前町との関係について述べてみたい。

① 東大道の振媛神社

この社は、羽太神社の境内社であるが、祭神は天皇の母「振媛命」と五番目の王妃「閔媛命(大良古墳の主大娘皇女の母)」のお二人である。即位直後から養蚕を推進されたのは、おそらく越前時代に振媛の指導で多くの王妃が養蚕に精出す姿を見ておられたからであろう。とするとこの神社は養蚕の神社ではないか。しかし最近安産の神として人気があると聞く。それよりも何よりも不思議なことは、この神社の住所が東大道路高向(継体天皇が母振媛に育てられた地名)となっており、古文書には「この社のことを「高向宮とも申す」とある。ちなみに丸岡の高向神社の祭神は継体天皇と振媛命のお二人である。また、継体天皇を一人子として育てられた振媛が安産の神とは思えない。継体天皇を祀らず、ゆかりの女神お二人(姑と嫁)を祀る当町のお社は、やはり養蚕と関係ありとしたい。

② 麻氣神社と養蚕神社

天皇の四番目の王妃「麻績媛」が病氣回復を祈願されたという由緒書もある、牧谷の式内社麻氣神社(祭神は奇玉饒速日命で珍しい神、非常に歴史の古い神社)の境内に養蚕神社がある。祭神は不明だが養蚕農家の信仰が厚かったと聞く。

③ 鹿蒜という地名

古代の鹿蒜駅(継体時代はまだ駅でない)で有名だが、万葉集の中で加比留・婦・加恵留とも書かれている。日本の古い言葉で蚕のことをヒル(敦賀はヒリ)と呼んだ。幼虫が純白の糸を吐いて美しいマユを作って蛹となり、蛾になって卵を産残す姿は誠に不思議であり、神業と考えて「神ヒル」としたものがカヒルとなり、養蚕振興の中心的な集落名となったと推測する。

蚕のことを、「おしら様・カイコ様・お蚕様」と人格化名で呼び、南向きの風通しのよい座敷を蚕室としていた。日本書紀の持統六年の条に「越前国、白蛾を献ず」とある。やはり越前は養蚕の原点であり、継体勢力を盛り立てた白神軍団が、この養蚕技術を南に伝える途中で、私達の故郷・南越前町各地に、その足跡を残したものであろう。(次号へ続く)